

長野県が示す望ましい学校・学級規模

「少子・人口減少社会に対応した活力ある学校環境のあり方及び支援方策」（平成 26 年 4 月長野県教育委員会）

○学年に複数の学級がある規模であること。（参考：長野県は小中共に 1 クラスの基準が 35 人）

- ・クラス替えができ、互いの見方や関わり方を見つめ直し、人間関係を広げることができる。
- ・学年、学級など異なる大きさの集団を生かした活動を様々に工夫できる。

○小学校では専科教員が配置できる規模にあること。

（参考：国の教員配当基準：6 学級～13 学級で専科 1 人、14 学級～25 学級で専科 2 人）

- ・専門性の高い授業が可能で、全校で統一した指導を進めることが可能となる。
- ・担任以外の教員と関わる機会ができ、多様な価値観に触れられる。

○中学校ではすべての教科の教員がそろえられる規模であること。

（参考：国の教員配当基準：2 学級で専科 2 人、3・7 学級で専科 4 人、4～6 学級で専科 3 人、8・9 学級で専科 5 人）

- ・免許外申請などにより対応することなく、教科の教員免許をもつ教員が指導できる。
- ・さらに各教科に複数の教員がいて、互いの専門性を生かした指導計画、教材、客観性を確保した評価テストなどが作成でき、指導力の向上、教育の質の保障を図りやすくなる。

○児童生徒の興味や関心に応じたクラブ活動や部活動を開設できる規模であること。

- ・児童生徒が主体的に関われる場や機会を保障できる。

○児童生徒が一定程度在籍している学級規模であること。複式学級にならない規模である

こと。（参考：長野県の複式（2 の学級基準は小中と共に 8 人）

- ・授業で多様な考えが出やすく、ボールゲームや合唱なども学習を広げやすい。
- ・一定期間ごとに、構成が異なる生活グループや係分担を組める。

以上のことから、子どもに集団での学びを保障するために、学年に複数の学級がある学校

規模が望ましい。少なくとも学年で 20 人程度を確保できることが望ましい。